

死を目前にした作家の心象風景 : ジョン・アップ ダイクの Endpoint

著者	柏原 和子
雑誌名	研究論集
巻	114
ページ	121-138
発行年	2021-09
URL	http://doi.org/10.18956/00008005

死を目前にした作家の心象風景

— ジョン・アップダイクの *Endpoint* —

柏原和子

要旨

本論はジョン・アップダイクの最後の作品となった詩 *Endpoint* を創作過程における作家の病状と重ねて分析することにより、死を目前にした作家の心象風景を明らかにしたものである。アップダイクは若い頃より苛まれてきた死の恐怖を芸術と宗教に慰めを得ながら自己の存在意義を確立することで緩和してきた。特に自分の遺伝子が子や孫に受け継がれ自分が生命のリンクとして自然の営みに関わっているという認識は死の恐怖の緩和において重要であった。余命を宣告された後も彼は「苦痛を蜜に変える」創作活動に頼りながら死と向き合い、時には不安や動揺も表すが、最後には晩年に完成させていた、神の創造物であるこの世のすべてを受容するという世界観に従い、生も死も良きものとして受け容れる。

キーワード：ジョン・アップダイク、*Endpoint*、死の恐怖、死の恐怖の緩和、死生観

I. はじめに

余命いくばくもないと宣告されたとき、人は何を感じ、どうふるまうのだろうか。死への恐怖心、生が中断されることへの悔しさ、やり残したことへの後悔—このような感情が渦巻き、とても平常心ではいられまい。2020年に公開された映画『グッバイ、リチャード』¹⁾ は死に直面した一人の男の姿を描いている。ジョニー・デップ扮する主人公の大学教授リチャードはある日、突然、末期の肺がんに罹患しており余命6か月であると宣告される。死の恐怖からくる一時の錯乱状態の後、彼は今までしたくてもできなかったことをして欲望のまま自由に生きる道を選ぶ。他人からどう思われようと自分の心に正直に生きることにしたのである。終盤のパーティーでリチャードは家族にすら告げていなかった病と余命のことを告白するスピーチをする。その中でこの状況になって初めて気づいた真実「よく生きることはよく死ぬことである (To live well is . . . to die well.)」を披露する。そして最後は誰にも告げずに姿を消す、すなわち自死を選ぶことが示唆されて終わる。

ジョン・アップダイクもまた、最後の長編となった *The Widows of Eastwick* (2008) を完成させ、その出版のためのキャンペーンで各地を回っている最中に、風邪を引いたと思って受

診した病院で最初は肺炎と診断され、その後の検査でリチャードと全く同じ、ステージ4の肺がんであると宣告された。彼のその後の短い生はりチャードのものと同様、死の恐怖に苛まれ、最後は諦めをもって死を迎えたのだろうか。あるいはまったく異なるものだったのだろうか。本論ではまずアップダイクが死の恐怖とどのように向き合ってきたかを概観したうえで、彼が病床で書いた最後の作品 *Endpoint* の詩を中心に、死を目前にした作家が何を考え、何を見ていたのかを明らかにしていきたい。

II. ウサギ4部作に描かれる死の恐怖

ここ数年、筆者はジョン・アップダイクの作品における「老い」の表象について研究を進め、彼がキリスト教徒として神が創造したこの世のすべてを受容する世界観を確立し、それに基づき、老いの苦境も克服してそれを受容していることを論証してきた。そして晩年の作品には自身の存在意義を確立することによって死の恐怖をも緩和できるとのメッセージが込められていることも明らかにした。²⁾

しかしアップダイクが死を恐れていなかったかというところではない。若い頃から彼の作品には死への恐怖が色濃く表れている。ここではまず代表作であるウサギ4部作の第1作、および第4作を取り上げ、死への恐怖がどのように描かれているかを改めて検証する。26歳で執筆したウサギ4部作の第1作 *Rabbit, Run* (1960) には作者を投影した主人公ハリー・アングストローム（愛称ウサギ）の存在不安とも結びついた死への恐怖がたびたび登場する。ルースと一夜を共にした翌日、ハイキングに行き、山頂からミニチュアのように見える町を見下ろしながら彼は次のように考える。

Someone is dying. In this great stretch of brick someone is dying. The thought comes from nowhere: simple percentages. Someone in some house along these streets, if not this minute then the next, dies; . . . He moves his eyes to find the spot: perhaps he can see the cancer-blackened soul of an old man mount through the blue like a monkey on a string. He strains his ears to hear the pang of release as this ruddy illusion at his feet gives up this reality. Silence blasts him. chains of cars creep without noise; a dot comes out of a door. What is he doing here, standing on air? Why isn't he home? He becomes frightened and begs Ruth, "Put your arm around me." (114)

今、この瞬間にも起こっている誰かの死への恐怖と自分が現実世界から抜け出してしまったという不安感からルースに助けを求めるウサギの姿が描かれている。他にも妻ジャンスの第二子

の出産を待ちながら妻子を顧みず家出をしたことへの罪悪感から「(自分の悪行のために) ジャニスか赤ん坊のどちらかが死ぬかもしれない」と考えたり、ジャニスの入院中、幼い息子ネルソンと二人で過ごす夜、幼子のあまりに深い眠りに“The child’s sleep is so heavy he fears it might break the membrane of life and fall through to oblivion”(230) と、このまま目覚めないのではないかという恐怖に襲われたりもする。またベッドに横たわって眠ろうとするが、体が斜めに傾いていく感覚に捕らわれ、このままどこかへ落ちて行ってしまうのではないかと考えるなど絶えず死の恐怖は彼に付きまとっている。

死の恐怖がピークに達するのは作家自らの老いが見え始めた50代の作品である。56歳で執筆した第4作の *Rabbit at Rest* (1990) では冒頭から死への不安がつづられている。

Standing amid the tan, excited post-Christmas crowd at the Southwest Florida Regional Airport, Rabbit Angstrom has a funny sudden feeling that what he has come to meet, what’s floating in unseen about to land, is not his son Nelson and daughter-in-law Pru and their two children but something more ominous and intimately his: his own death, shaped vaguely like an airplane. The sensation chills him, above and beyond the terminal air-conditioning. (3)

空港で息子一家の到着を待ちながら、自分が待っているのは自身の死であるかのように感じているウサギの様子が描かれているが、これを皮切りにこの小説には至る所に死の予感が満ちている。彼は直前に起きたスコットランド上空での飛行機事故で亡くなった乗客に自分を重ね合わせ、“with a roar and giant ripping noise and scattered screams this whole cozy world dropping away and nothing under you but black space and your chest squeezed by the terrible unbreathable cold”(8) と落下の恐怖に怯えている。

死への恐怖は自らの老いの自覚によって増幅される。56歳になったウサギは最近、家族の者たちが彼をいたわるような口のきき方をするようになり、まるで耄碌したかのように扱われていると感じるが、実際、肉体的衰えは自覚せざるを得ない。高校時代、バスケットボールのスター選手だったウサギも今ではジャンクフードの食べ過ぎのため肥満気味で、少し速足で歩いただけで鼓動が速くなって息が切れてしまい、また時折、胸のあたりに締め付けられるような感覚を覚えることさえある。判断力も鈍り、空港で家族とはぐれてしまったり、孫たちと遊びに行ったジャングル・ガーデンで鳥の餌をスナック菓子と間違えて食べてしまったりといった失敗を犯す。このような老いの自覚は迫りくる死への恐怖を呼び起こし、小説全体に死の予感が漂っているのである。

この漠然とした死への恐怖はウサギが心臓発作を起こして集中治療室に入れられると急に現

実味を帯びる。以下の引用は病室に息子ネルソンがパンナムジェット機の墜落事故の記事が載った新聞を持ってきた際のウサギの感情を描いた部分である。

[D]eath is not a domesticated pet of life but a beast that swallowed baby Amber and baby Becky and all those Syracuse students and returning soldiers and will swallow him, it is truly there under him vast as a planer at night, gigantic and totally his. His death. The burning intensifies in his sore throat and he feels al but suffocated by terror. (176)

死は今まで見知らぬ人たちを呑み込んできたように自分をも呑み込もうとしている。自分のすぐ前に死が存在することを認識し恐怖で息が詰まりそうになっているウサギの様子が描かれている。

死への恐怖は「無駄な努力」のモチーフによってさらに増幅する。「無駄な努力」の概念はゴルフ仲間のバーニーの「長年、毎日働いてきてどこに幸せがあるかと思えば、自分の後ろにある」という言葉や、スナック菓子と間違えて鳥の餌を食べてしまい、孫娘のジュディにそれを指摘されたときに突然感じる、自分の人生が無駄な努力ではなかったかとの疑問に現れている。彼は自分が主体性もなく、意味のない人生を送ってきたことを発見し、また求めてきた自己実現の機会をまだ得ていないことに気づきショックを受ける。このまま死を迎えることになれば、まさに彼の人生は無駄な努力、取るに足らないつまらないもので終わってしまうのだ。この時のウサギは『グッバイ、リチャード』の主人公と同じく、よく生きてこなかったからよく死ぬことはできないとの思いに駆られている。

Ⅲ. 存在意義の確立と死の恐怖の緩和

アップダイクの作品の主人公が強い死の恐怖から解放されるのは何らかの形で自己の存在意義を確信できるときである。*Rabbit at Rest*では海での舟遊びの事故で孫娘ジュディを救助したことがウサギに自分の存在意義を確信させる。ウサギはまずジュディという一人の人間の命を救ったことにより自分の存在はつまらないものではなく意味のあるものだとの確信を得る。さらに重要なことは彼が助けたのは彼の遺伝子を受け継ぐ孫娘の命であったことである。自分の遺伝子が孫娘に受け継がれ彼の死後もそれは生きながらえる。彼の人生は彼自身が生命の連鎖の一部であるから意味がある。舟遊びの事故の際、ウサギは単にジュディの命を救ったのみならず、生命の連鎖が途切れることを防いだのである。それゆえにこの事故はウサギが自分の存在意義を明確に確信する機会となり、これ以後、彼が自分の人生を「無駄な努力」だと考えることはなくなる。その後の展開から実はジュディは溺れたのではなく、祖父をからかうた

めに帆の下に隠れただけであり、ウサギは彼女を救ったと誤って認識していたにすぎないことが判明する。そしてジュディは何度か本当の事を祖父に告げるがウサギはそれを信じず、あくまでも自分の英雄的行為を信じる。それほどまでにウサギの確信は堅固なものである。そして強烈に襲いかかってきていた死の恐怖も緩和され、次第に死を客観的に見るできるようになり、最後は息子ネルソンに“it isn't so bad.” (512) と言って死んでいく。

また最後の長編小説となった *The Widows of Eastwick* でも死の恐怖におののくアレクサンドラを救うのは孫息子の予期せぬ一言がきっかけで彼女が気づく命の連鎖であった。娘マーシーの家を訪れ、仲間の魔女たちとともに30年ぶりにイーストウィックの町に戻ってきた理由を述べるアレクサンドラが“I don't know exactly why we came. Perhaps it was to face what we did here. To make it right, or less wrong, before we—”と言葉を澁ませたとき、孫息子のハワードが無邪気に“Die!”と叫びマーシーに叱られる。しかしその言葉がアレクサンドラに一種の啓示を与えたのである。

But in the child's saying the unsayable Alexandra saw that right here, in front of her, was one answer to death—her genes living on. The tussle of family life, the clumsy accommodations and forgiveness of it, the comedy of membership in a club that has to take you in at the moment of birth. . . . Alexandra pictured levels and layers of inheritance and affinity invisibly ramifying cards dealt out to absent and dead and yet-to-be-born players. Everybody gets a hand. (273)

彼女の子や孫はその存在を彼女に負っており、彼女は永遠に続く生命の連鎖の中に確かに存在している。それは彼女が太古の昔から永遠の未来へと続く自然の営みに加わっていることを意味する。アレクサンドラは自分が自らの遺伝子を子孫へと伝え、自分が生命の連鎖のリンクとなったことに自分の存在意義を見つけたのである。彼女は自分の生と死がただ単に個人的なものではなく自然の営みにおける重要な役割を持つことを悟ったのである。そして死への恐怖はこの存在意義の確信により緩和され、アレクサンドラは以前のように死を恐れなくなった。

以上のように、アップダイクの主人公たちは自分が生命の連鎖に加わっていると認識することで自らの存在意義を確認し、自分の存在が意義あるものと確信することによって生殖という役割を果たした後の死をも受け容れることができるようになるのである。

IV. もう一つの死の恐怖の緩和策—芸術と宗教

上述のように作者を投影した登場人物の描写からアップダイクは死への恐怖を緩和する術を

身に着けていたと思われるが、これは晩年になって完成させた世界観に基づくものである。彼はこの世のすべてが神によって是認されており、不完全で墮落してはいてもこの世をそのまま受け容れなければならないと考える。すなわち老いや死も神の創造物として受容するのである。そしてその受容を可能にするのは自分自身が神の創造した世界の一部であり、神から受け容れられているという意識である。³⁾ では、このような世界観を持つ以前のアップダイクは死の恐怖とどのように向き合っていたのであろうか。ドナルド・グライナーはアップダイクが30代であった1960年代に書いた詩 *Bath after Sailing* の創作過程を詳細に分析することによって “As the complex textual history of *Bath after Sailing* demonstrates, he relied on creativity, both the artistic use of a bulkwark against fear, death, and the blackness of darkness” (Greiner 66) と、作家が死の恐怖に対抗するために創造性に頼ったと主張している。この詩では詩人がスループ帆船で舟遊びの一日を過ごした後、浴槽につかりながら船上で感じた暗黒の水中での死の恐怖を反芻している。グライナーはタイプ原稿、修正版タイプ原稿、ゲラ刷り初校、ゲラ刷り再校の4つを比較することにより詩人の、死の恐怖を創作により緩和させようとする試みを読み解く。

たとえば船の揺れや傾きによって暗黒の海へ滑り落ちてしまうのではないかという恐怖を感じている詩人が、「死」の表現を何度も修正している部分がある。最初のタイプ原稿では第6スタンザで “I did not want, I had not wanted / to die.” に続く部分を “I saw death mirrored in that” という直接的な表現にしているが、修正版タイプ原稿では “I saw what it was in that” と婉曲表現に変えている。足下に潜む死を十分に意識しながら彼は遠回しの表現という比較的安全な装置に頼るのである (Greiner 58)。死から目を逸らそうとした詩人であるが、次のゲラ刷り初校では絶滅の全くの空虚さ、死の無意味さを強調するような修正を施している。同じ部分を “I saw death’s sense in that” と再び “death” という語を戻し、さらにゲラ刷り再校では “I saw death’s face in that” と「顔」という語で「死」を人格化するという強調を施している。また第3スタンザの1行目を “Still I see the heartless waves” から “I can’t stop seeing the heartless waves” と変えており、波の上で過ごした一日が彼の目に忘却の虚無を刻印づけた (Greiner 64) ことを強調している。このように「死」は恐怖の対象でありながら詩人の想像力を刺激するものでもあり、アップダイクは自分の抱いた強烈な死への恐怖を詩という芸術へと昇華することによって客体化し緩和しようとしている。

Bath after Sailing において上記のようにアップダイクは「死」をめぐる次々と修正を施したが、最初からほとんど修正を加えなかったスタンザもある。第10スタンザは宗教的信仰を告白している部分であるが、最終稿では次のように書かれている。

I thank you, God of trees and air,
whose steeples testify
to something steady slipped by chance
upon Your tar-green sliding face. (*Tossing and Turning* 18)

これはそれ以前の原稿では最後の行が“upon Your tar-green *formless* face.” (my italics) となっており (Greiner 61)、アップダイクは1語のみ、それも1度だけ修正を加えるにとどまっている。グライナーは“Updike’s God was not formless but undefinable. (形がないのではなく説明できないもの)” (Greiner 61) と修正の理由を押し量っているが、神に対する信仰自体が消えることはない。アップダイクは自伝的エッセイ“The Dogwood Tree: A Boyhood”の中で、自分の人生における三大秘密として性、宗教、芸術を挙げているがこれらは彼の創作に力を与えるとともに死が与える虚無に対する慰めを与えるものであった (*Assorted Prose* 180-186)。この *Bath after Sailing* においても死から目を背けたり、また向き合ったりする際に、神の存在によって安堵感をあたえられていたことがこの第10スタンザから窺える。アダム・ビグリーの伝記によればこの詩が書かれた1960年代のアップダイクは軽度の精神的危機に陥っており死の恐怖と闘っていた (Bigley 223)。グライナーはこの精神的危機の主な原因は存在不安でありそれは宗教的信仰と自らの複数の不貞行為との罪悪感に満ちた葛藤であったと考えている (Greiner 57)。アップダイクは特に若い頃は決して熱心なキリスト教徒であったわけではなく宗教をアイロニカルに扱うこともしばしばあったが、生涯を通じて神から離れることはなく、芸術同様、宗教も死への恐怖心を和らげ、彼を慰めるのに大いに役立ったのである。

上述したようにアップダイクは若い頃から死の恐怖を創作と宗教によって緩和しており、また晩年には自分の存在意義を確信することが自らの生を充実させることになり、それにより死の恐怖も和らげることが可能になると作品中に示してきた。また彼の最後の短編となった“The Full Glass”には次のような一節がある。

As a child I would look at [my grandfather] and wonder how he could stay sane, being so close to his death. But actually, it turns out, Nature drips a little anesthetic into your veins each day that makes you think another day is as good as a year, and another year as long as a lifetime. The routines of living—the tooth-brushing and pill-taking, the flossing and the water glass, the matching of socks and the sorting of the laundry into the proper bureau drawers—were you down. (*My Father’s Tears* 289)

作者を投影したと思われる主人公は幼少期に同居していた祖父と同じような年齢となった今、

自然が麻酔薬を血管に落としていくように日に日に死への恐怖は薄れていくものだということが分かったのである。それではアップダイクは死を目前にしたときもこれらの緩和策により平静に死を受け容れられたのであろうか。果たしてこのような緩和策は自らの死を目前にしても有効だったのだろうか。

V. 最後の詩 *Endpoint*

アップダイクが最後に上梓したのは詩集 *Endpoint and Other Poems* (2009) であるがこの詩集の最初に収められているのが死の直前に書かれた *Endpoint* である。全部で17編の詩から構成されるこの詩の前半の8編は2002年から2008年の彼の誕生日に書かれた Birthday Poems である。後半、満ち足りた日常生活の中でふと感じる自らの老いを詠んだ “A Lightened Life” の後は、“Euonymus 11 /02/ 08” から “Fine Point 12/ 22/ 08” まで8つの詩には、まるで死に至る記録として書いたかのように一つを除いてすべてタイトルに日付が入っている。実際、これらの詩には直接的な恐怖や悲しみなどの感情は表現されていない。自らの状況を客観的に観察しているような、まさに記録と呼べるものである。

先述したようにアップダイクは2008年の秋、*The Widows of Eastwick* の出版キャンペーンでアメリカ各地を回っている最中にしつこい咳の症状が治まらず、最初、肺炎だと診断され、その後の検査で末期の肺がんであることを告げられる。ここではアダム・ビグリーの伝記 *Updike* とケイティ・ロイフの *The Violet Hour: Great Writers at the End* よりアップダイクの家族や友人へのインタビューをもとに書かれた “John Updike” の章を参考に、アップダイクがどのような状況でどのような詩を書いたのかを検証し、死を目前にした作家の心象風景を探っていく。

A. 末期がん診断以前の詩

まず執拗に続く咳の原因が肺炎だと診断され自宅で療養中に書いた11月2日付の “Euonymus” の詩である。

My window tells me the euonymus
arrives now at the last and deepest shade
of red, before its leaves let go. One of
my grandsons leaves a phone message for me;
his voice has deepened. A cold that wouldn't let go
is now a cloud upon my chest X-ray:

pneumonia. My house is now a cage
I prowl, window to window, as I wait

for time to take away the cloud within.
The rusty autumn gold is glorious.
Blue jays and a small gray bird, white-chested,
decline to join the seasonal escape
and flit on bushes below. Is this an end?
I hand, half-healthy, here, and wait to see. (21)

家の窓から見える自然の風景に深まりゆく秋の気配を感じ、孫息子が残してくれた電話のメッセージに自分に対する彼の愛情を感じている。“his voice has deepened”という表現には孫息子の成長とともに祖父のことを心配している様子が伝わってくる。いつもこの時期になるといなくなる小鳥たちがまだ見られるのは自分に対して別れを惜んでいるからなのかとふと思ひ、“Is this an end?”と自分の死期が迫っているのではないかとの疑問がもたげる。この疑問がさらに強くなるのが次の11月6日付の“Oblong Ghosts”である。

A wake-up call? It seems that death has found
the portals it will enter by: my lungs,
pathetic oblong ghosts, one paler than
the other on the doctor's viewing screen.

Looking up “pneumonia,” I learn
it can, like an erratic dog, turn mean
and snap life short for someone under two
or “very old (over 75).”

Meanwhile, our President Obama waits
downstairs to be unwrapped and I, a child
transposed toward Christmas Day in Shillington—
air soft and bright, a touch of snow outside—
pause here, one hand upon the banister,
and breathe the scent of fresh-cut evergreens. (21-22)

医師から X 線写真の説明を受け、この「肺炎」は乳幼児や後期高齢者には命取りになる可能性があるとする。「死」は彼の肺という玄関口を見つけ体内に入り込もうとしている。「肺炎」が引用符で囲まれているのは既にアップダイクはこれが肺炎よりもっと重い病であることに気づいていたからであろう。死期が迫っていることがほぼ確実になりながらも最後のスタンザはある種の希望を感じさせる。アップダイクが支持していたバラク・オバマが大統領選挙で勝利し後は任命を待つばかりである。それを故郷のシリントンでのクリスマスの日の、子供だった自分と重ね合わせる。⁴⁾ “air soft and bright” や “breathe the scent of fresh-cut evergreens” という表現には何か新しいものを待ちわびてわくわくする気持ちが表れている。「死」はアップダイクにとって恐怖の対象ではなく何か新しい世界へ誘う者となったのであろうか。少なくともここには自分の置かれた新たな状態、死へ至る未知の道への好奇心のようなものが感じられる。

B. 肺がん診断後の詩

次の “Hospital 11/ 23-27/ 08” はマサチューセッツ総合病院へ検査入院し、病名が肺がんであると判明したときの詩である。8つのスタンザから成る詩は2つずつアステリスクで区切られており、タイトルの日付からも何日かに分けて書かれたものであろうと推測される。コンピューター断層撮影機器による検査に言及した第1スタンザの後、第2スタンザでは「死」について次のように述べる。

God save us from ever ending, though billions have.
The world is blanketed by foregone deaths,
small beads of ego, bright with appetite,
whose pin-sized prick of light winked out,
bequeathing Earth a jagged coral shelf
unseen beneath the black unheeding waves. (22)

神はわれわれを死から救うが何十億もの人がすでに死んできた。一人一人の命の灯はかすかに瞬いて消え失せ、地球に珊瑚棚を残すがそれは暗黒の波の下で見えない。神に頼りたいが頼りきれない思いと、自分には後世に残せるものがあるがそれは自分の死後は見えなくなってしまうと、かなり悲観的になっている詩人の姿が見られる。

第3、第4スタンザは子供や孫たちが見舞いに来た時の心情を詠っている。ロイフによればアップダイクの次男マイケルは病院での父は “a good host” であったと感じた。またこの時期に見舞いに訪れた人たちがアップダイクの様子を表すのに最も頻繁に使った表現は “cheerful”

だったという (116-17)。しかしそれはアップダイクの演技であったことがこの2つのスタンザからは分かる。

My visitors, my kin. I fall into
the conversational mode, matching it
to each old child, as if we share a joke
(of course we do, the dizzy depths of years)
and each grandchild, politely quizzing them
on their events and prospects, all the while
suppressing, like an acid reflux, the lack
of prospect black and bilious for me.

Must I do this, uphold the social lie
that binds us all together in blind faith
that nothing ends, not youth nor age nor strength,
as in a motion picture which, once seen,
can be rebought on DVD? My tongue
says yes; within, I lamely drown. (23)

普段と同じように冗談を言って快活にふるまってはいるが、それは見舞いに来てくれた家族を巻き込んだ“the social lie”であり、若さも強さも何も終わらないと盲目的に信じることで私たち皆を一緒に結びつけている社交上の嘘なのである。上辺は快活にふるましながら内面ではぎこちなく溺れている。死への恐怖という心痛を隠し、“a good host”としてふるまうことが子供や孫たちへの愛情を示す行為でもあったのだろう。

第5、第6スタンザは亡くなった家族や友人たちに思いを馳せ、今は彼らから学ばねばならないと締めくくる。第7スタンザでは、作家らしく、まもなく終わりを迎える自分の人生を本に例えている。“Endpoint, I thought, would end a chapter in / a book beyond imagining, that got reset / in crisp exotic type a future I / —a miracle!—could read. My hope was vague / but kept me going, amiable and swift” (24)。「最後の時」は本の1章を終わらせるが、その本を未来の自分が読むことを想像している。また自分の希望はほんやりとしてはいるがまだ自分を前に進ませている。しかし最後の第8スタンザでは心細く弱気になり妻の声や肉体を必要としている。

My wife of thirty years is on the phone.
I get a busy signal, and I know
she's in her grief and needs to organize
consulting friends. But me, I need her voice;
her body is the only locus where
my desolation bumps against its end. (24)

アップダイクの作家としての仕事を全面的にバックアップするマネージャーのような役割を果たしてきた妻マーサは、彼の作家人生を終わらせるためにさまざまな調整作業を余儀なくされたことであろう。夫を亡くす悲しみの中で、自分のために忙しくしてくれている妻に甘えることはできないのは分かっているが、不安を鎮めるために傍にいてほしいというのが彼の本心なのである。

C. 余命宣告後の詩

この入院中にアップダイクは化学療法を希望するかどうか医師に打診される。化学療法によって1年、あるいは少なくとも数か月は良質の時を過ごすことができると聞いてアップダイクはこれに同意するが、彼は涙を流していたという (Roiphe 119)。彼は *The Widows of Eastwick* を書き上げた後、聖パウロを主人公とした新たな小説を書き始めていたというが、あと数か月あれば書きあげられると考えたのかもしれない。しかしながら医師の口から明確に余命を知らされたことがどれほどショッキングなことであったかは想像に難くない。この療法を受けなければ彼の命は数か月さえ持たないことが分かったのである。

12月11日付の “The City Outside” ではその化学療法を受けながら自分の死についてさまざまに思いめぐらしている。第4スタンザでは、長年、感じてきた落下の恐怖、特に飛行機の墜落による死を非常に恐れていたアップダイクは病院のベッドに横たわっている今の状態をいささかのユーモアを交えて次のように詠う。 “I'm safe! Away with travel and abrupt / perspectives! Terra firma is my ground, / . . . / My terrors . . . will be / achieved from thirty inches, on a bed” (25)。今、落下するとしても病院のベッドからせいぜい30インチの高さからである。落下の恐怖に怯えることはないと自らを慰めているようにも取れる。そして最後の2スタンザはこの世とあの世を比較するかのような詩である。

Strontium 90—is that a so-called
heavy element? I've been injected,
and yet the same light imbecilic stuff—

the babble on TV, newspaper fluff,
the drone of magazines, banality's
kind banter—plows ahead, admixed
with world collapse, atrocities, default,
and fraud. Get off, get off the rotten world!

The sky is turning that pellucid blue
seen in enamel behind a girlish Virgin—
the doeskin lids downcast, the smile demure.
Indigo cloud-shreds dot a band of tan;
the Hancock Tower bares a slice of night.
So whence the world's beauty? Was I deceived? (25-26)

ストロンチウム90を注入されながら TV や雑誌で報道されるくだらないニュースを目にし、この世は破綻、残虐、怠慢、欺瞞に満ちていると思い、「この墮落した世界を離れよ」と叫ぶ。それとは打って変わって最終スタンザの空の描写はこの上なく美しい。この「美」はこの世のものではなかったのだろうかと思われるほどである。「死」とは墮落したこの世を離れて「美」に満ちたあの世へと行くことなのだろうか。化学療法は想像以上に過酷なものであった。アップダイクは次の予約を取ろうとする医師と妻に、もうこれを受けるつもりはないと言い、これ以上の治療を拒否した (Roiphe 118-19)。この詩は死を目前にして何とか自分を慰めようとしているかのようにも読めるが、この世での生を諦めて来世での生を考え始めた詩とも読める。

D. がんの転移判明後の詩

いずれも12月22日に書かれたと思われる最後の3編はいよいよ死期が迫ったことが判明してからのものである。まず“Needle Biopsy” はがんの転移が疑われ生体検査を受けたときの状況を詠ったものである。薬の効果で非常に平静な気分で検査を受けることができ、“I had not hoped / to find, in this bright place, so solvent a peace” (28) と思った数日後、副腎への転移という検査結果がもたらされる。この転移は彼の死期が予想していたよりも早く訪れることを意味した。当然、アップダイクは衝撃を受けたはずであるが、転移を述べる最後の2行は“Days later, the results came casually through:/ the gland, biopsied, showed metastasis” (28) と淡々とその事実のみを語り、自分の感情は一切、描いていない。これはあまりの衝撃の大きさに何も書けなかったのではなく、病状を端的に記すことによって自分を客観的に見つめ、いよいよ間近に迫った死に向き合おうとしたものと思われる。それは次の詩“Creper” を読むと明確

になる。

With what stoic delicacy does
Virginia creeper let go:
the feeblest tug brings down
a sheaf of leaves kite-high,
as if to say, *To live is good*
but not to live—to be pulled down
with scarce a ripping sound,
still flourishing, still
stretching toward the sun—
is good also, all photosynthesis
abandoned, quite quits. Next spring
the hairy rootlets left unpulled
snake out a leafy after life
up the same smooth-barked oak. (28)

枯れたツタの葉がわずかに引っ張っただけで束になって飛んでいく様を生きることも死ぬことも良いことだと言っているかのようだと感じ、翌春には引き抜かれずに残った枝根が葉の生い茂った来世をくねくねと進み、その同じ椗の木を這い上ると述べる。“To live is good but not to live is good also” という部分はアップダイクが死を受け容れていることを示している。生きないこと = 死ぬことが良いことだというのは生も死も神の創造物であるからである。そして“Next spring”以降の行は、死後は永遠の命を与えられるとのキリスト教徒としての信条をここでは明確に表現しており、キリスト教徒としての死を迎えること、神にすべてを委ねることにより平穏を取り戻したアップダイクの姿が窺われる。そしてアップダイクが書いた最後の作品が“Fine Point 12/ 22/ 08”である。

Why go to Sunday school, though surlily,
and not believe a bit of what was taught?
The desert shepherds in their scratchy robes
undoubtedly existed, and Israel's defeats—
the Temple in its sacredness destroyed
by Babylon and Rome. Yet Jews kept faith

and passed the prayers, the crabbed rites,
from table to table as Christians mocked.

We mocked, but took. The timbrel creed of praise
gives spirit to the daily; blood tinges lips.
The tongue reposes in papyrus pleas,
saying, *Surely*—magnificent, that “surely” —
*goodness and mercy shall follow me all
the days of my life, my life, forever.* (29)

生涯を通じて宗教を時にアイロニカルに扱ってきたアップダイクであるが最後は確かなものとして聖書の言葉に身を委ねる。最後の2行のイタリクスは詩編23編からの引用であるが、アップダイクはそれに“my life, forever”と祈りとも取れる言葉を付け加えて人生最後の詩を終えた。ここには余命の短さを知って医師の前で涙を流した心の乱れは見られない。感傷や自己憐憫の情も見られず、神への信頼のうちに自らの生を終えようとする詩人の平静さが際立つ。

VI. 死の恐怖を乗り越えて

このように病気の段階を経てアップダイクの死と向き合う姿勢は変化していった。「肺炎」と診断され鬱々と療養生活を送っていた時期にはただ漠然と死への恐怖を感じるだけであったが、病名が肺がんであると判明すると死は現実のものとしてアップダイクの前に立ちはだかった。見舞いに来た家族とは「社交場の嘘」を共有し病気のことなど気にしていないかのようにふるまうが、一人になると悲観的になり妻に縋りたいと思う。しかし余命宣告を受けた後、彼は死を受け容れる方向へと向かう。美しい平穏な空を来世に見立てた描写はそれを示している。がんの転移が判明し、いよいよ死が間近に迫った時期の最後の3編の詩は、驚くほどの平静さを示している。亡くなる数日前、アップダイクはマーサに“Are you ready for the leap?”と尋ねた。これに対し彼女が“Are you?”と逆に問いかけると、彼は“Yes!”と答えたので彼女は“I am too, . . . And so is God.”と返したが、彼がとても大きな声で“yes”と言ったのでマーサは驚いたという (Roiphe 155)。もはや死の恐怖を乗り越え、進んで死を受け容れようとするアップダイクの姿が浮かび上がってくる。

Endpoint の数々の詩から、死と向き合う毎日の中で、宗教が彼の支えとなったのは明らかである。最後の数日を過ごしたホスピスでアップダイクは長女エリザベスと長男デイヴィッドとともに聖公会の司祭と手をつなぎ「主の祈り」を唱えたとビグリーは記している (483)。そ

れでは、もう一つの緩和策、芸術は死を目前にして恐怖を和らげる手段となったのであろうか。ロイフはアップダイクの最後の時についての章を書く際にハーバード大学のホートン図書館にあるアップダイクのアーカイブを訪れ、彼が病院で書いた自筆の原稿を目にしたときの驚きを次のように表している。

Much of my sense of his illness, and his dedication to work, came from a trip to the Updike archives at Harvard's Houghton Library. The handwritten manuscripts of the final poems were particularly startling, as the handwriting itself told a story about the sheer effort it took to get the words on the page. One can know this abstractly, or have it described, but it is very different to see it in the spidery letters themselves, the slanted lines, the scratched-out words. (296)

アップダイクは死の直前まで創作の努力を続けていたのである。判読しがたい手書きの文字や修正のために線を引いて消された単語は苦しい状態での推敲作業を彷彿とさせる。30代のアップダイクが *Bath after Sailing* で行っていたような創造性によって死の恐怖を緩和する試みは病院のベッド上でも行われていたのだ。

VII. おわりに

『グッバイ、リチャード』のリチャードは死と向き合うことを避け、自らの欲望に正直に従うことを選んだが、不倫をしている妻にも、それで彼女が幸せでいられるならと干渉せず、レズビアンであることを告白した一人娘には恋愛相談に乗ってやるなど、家族の幸せを願う気持ちは持ち続けた。それは彼なりの“To live well”だったのかもしれない。一方、若い頃から死の恐怖に苛まれていたアップダイクは芸術と宗教を慰めに、自己の存在意義を確立することで死の恐怖も緩和できることを知った。すべてを受容する世界観を完成させた彼は理性では死も受容できると考えていたに違いないが、いざ自らの死を目前にすると事はそう簡単には行かなかった。しかし自らの創造性で死の恐怖を芸術に昇華し宗教に頼ることで最後は恐怖を乗り越え、“To live is good, but not to live is good also”という心境に達し、静謐のうちに最後の時を迎えた。ロイフはアップダイクが自分の作家活動について述べた30代の頃の言葉に注目する。“Being able to write becomes a kind of shield, a way of hiding, a way of too instantly transforming pain into honey” (123-24). この“transforming pain into honey”（苦痛を蜜に変えること）こそアップダイクが行ってきた創作活動であった。紙面上で死の恐怖という苦痛を詩や小説という甘美な蜜に変えてきた作家は最後には自らが実人生でこの“transforming pain

into honey”を経験したのである。

謝辞：本研究は、JSPS 科研費 JP17K02570の助成を受けたものであり、ここに記して謝意を表する。

註

- 1) 原題：Richard Says Goodbye. アメリカ公開は2018年。
- 2) アップダイクの老いの受容については次の拙稿を参照のこと。「高齢者差別社会における『老い』の受容—ジョン・アップダイクの描く『老い』」および「*The Widows of Eastwick*—老いを超克する物語」。
- 3) アップダイクの世界観については拙稿「John Updikeの現実受容の世界観—Saul Bellowとの比較において」および「ソール・ペローの“修復”とジョン・アップダイクの“受容”」を参照のこと。
- 4) アップダイクは13歳まで過ごしたペンシルバニア州シリントンの町に非常な愛着を持っていた。そこで過ごした子供時代に立ち返るような描写も特に晩年の作品には頻繁に登場する。ピーター・ベイリーはある作品の1節を“The basic treasure of his life was buried back there, in the town of Olinger[Shillington], and he kept hoping to uncover it” (*Licks of Love* 16)と引用して“his late-career penchant for returning to territory he had visited earlier”を主張し、その傾向が*Endpoint*にも明らかに見られることを論証している(Bailey 83-84)。

引用文献

- Bailey, Peter J. “Autobiography, Updike, and the ‘Self-Serving Corruptions of Fiction.’” *The John Updike Review*, vol. 2, no. 2, Spring 2013, 77-94.
- Begley, Adam. *Updike*. New York: Harper-Collins, 2014.
- Greiner, Donald J. “John Updike’s Broadships: The Blackness of Death and *Bath after Sailing*.” *The John Updike Review*, vol. 5, no. 1, Winter 2017, 53-68.
- Roiphe, Katie. *The Violet Hour: Great Writers at the End*. London: Virago Press, 2017.
- Updike, John. *Assorted Prose*. New York: Knopf, 1965.
- . *Endpoint and Other Poems*. New York: Knopf, 2009.
- . *My Father’s Tears and Other Stories*. New York: Knopf, 2009.
- . *Rabbit at Rest*. New York: Knopf, 1990.
- . *Rabbit, Run*. 1960. New York: Knopf, 1987.
- . *Tossing and Turning*. New York: Knopf, 1977.
- . *The Widows of Eastwick*. New York: Knopf, 2008.

柏原和子「高齢者差別社会における『老い』の受容—ジョン・アップダイクの描く『老い』」、金澤哲編著『アメリカ文学における「老い」の政治学』、松籟社、2012、225-248。

--. 「John Updikeの現実受容の世界観—Saul Bellowとの比較において」『関西外国語大学研究論集第90号』関西外国語大学、2009、1-14。

--. 「ソール・ペローの“修復”とジョン・アップダイクの“受容”—『サムラー氏の惑星』と『帰ってきたウサギ』を中心に」日本ソール・ペロー協会編『ソール・ペローともう一人の作家』第8章、彩流社、2019、167-189。

--. 「*The Widows of Eastwick*—老いを超克する物語」『関西外国語大学研究論集第100号』関西外国語大学、2013、39-55。

『グッバイ、リチャード』(*Richard Says Goodbye*). Directed by Wayne Roberts, performances by Jonny Depp, Zoey Deutch, Danny Huston, Rosemarie Dewitt, etc., RSG, 2018.

(かしはら・かずこ 外国語学部教授)